

笛吹市探訪

武田氏と笛吹市⑥

武田氏と 二之宮美和神社

「武田の・・・」という肩書きを持つ文書や物品について語るとき、特に歴史研究家は慎重な判断をすることが必要になります。

この世の中に伝わっている「武田信玄の古文書」といわれている文書や「武田信玄ゆかりの品々」のなかには、後世に作られたかなりの数の偽物が存在しているからです。また、武田信玄、山本勘助には多くの伝説がつきまわって

おり、そのために武田に関する歴史的事実と伝説が混同されて現在に伝わっているのです。

「武田氏」は江戸時代、庶民や大名に圧倒的な人気を誇っていました。そのため、多くの絵師が「武田氏」に関する絵を描いています。武田二十四将にもいろいろなる人物の組み合わせの絵が残りますし、山本勘助もどちらの目がつぶれているかは絵師によって違います。



赤札紅糸素懸緘胴丸佩楯付

なかには両目を開いている絵もあります。それよりも、唯一古文書に登場する勘助は「管助」と表記されています。もちろん、武田氏に関しては本物の資料もたくさんあります。そして、市内にも多くの本物の

資料が伝わっています。

御坂町二之宮の地名は、甲斐の二之宮である美和神社に由来します。この美和神社にも武田家ゆかりの品々が宝物として伝えられてきました。

美和神社に伝わる宝物のひとつ、赤札紅糸素懸緘胴丸佩楯付（あかざねべにいとすがげおどしどうまるはいたてつき）というやや小ぶりな甲冑は、武田晴信が元服の時に身に着けた初着の甲冑といわれています。中世の胴丸と近世の当世具足との折衷形式が見られ、中世から近世に移る過渡期の形を示すものとして高い歴史的評価を受けています。神社の宝物帳には、

永禄9年（1566年）11月に武田信玄が納め



板絵著色三十六歌仙図

たとあります。

また、美和神社には板絵著色三十六歌仙図（いたえちやくしよくさんじゅうろつかせんず）という36枚の板絵が伝わっています。これらの絵は永禄6年（1563年）、武田信玄、義信親子の連名で寄進されたものといわれ、沼田与太郎忠久の筆により、小野小町や紀貫之といった歌人の姿と和歌が描かれています。これらの絵のなかで一部は風雨の影響により色彩がはがれているものがありますが、そのほとんどは鮮やかな色彩が残り、36枚すべてが現存しています。

これら武田家ゆかりの品々は地域の人々の手で大切に伝えられてきました。私たちもこれらの宝物を後世に伝えていきたいものです。